

ワルター・フバツチ著『アルプレヒト・フォン・ブランデンブルグ』

——Walther Hubatsch: Albrecht von Brandenburg-Ansbach, Deutschordens-Hochmeister und Herzog in Preußen. 1490—1568. (Studien zur Geschichte Preußens. Bd. 8) Heidelberg 1960.

阿部 謹 也

フオルストロイターがいみじくも《プロイセンの中世の秋》と呼んだ十五・六世紀の転機は、一五二五年をエポッヘとして回転してゆく。過去一世紀にわたって煮つめられてきた生活・思想の各方面における対立が、一応の結着をみたと言う意味でこの年はエポッヘなのだが、そのような対立がはじめて露呈されたのは一四一〇年であり、この年も亦一つのエポッヘと言えよう。当時としては他に並ぶものなかつた騎士修道会国家の緊密な支配組織の底辺から、徐々に力を蓄えつつあった都市、農村領主らの等族が一四一〇年対ポーランド戦の破局を契機として浮び上り、以後十五世紀末に至る迄騎士修道会とこれら等族との対決が騎士修道会国家と言う中世的制度の存続をめぐって争われる。特徴的にも等族の存在を認めることの出来なかつ

たこの国家も、農村領主の擡頭と都市の衰退によって農民を直接に把握する道を閉ざされ、一五二五年にはルター派世俗公国となり、いわゆる《グーツヘルシャフト》への道が国法上からも開かれたのである。

時代が変ってゆくというのはどういふことなのか、客観的條件の変化と共にそれに働きかける社会集団や個人の可能性はどう変ってゆくのか、結果はともかくとして、転換期における社会集団や個人の *Leiden und Freude* を知るにはどうしたらよいか。このようなナイヴな関心から十五・六世紀のプロイセンをみると、そこには無限の材料が潜んでいるように思える。ドイツ騎士修道会最後の総長であり、プロイセン公国初代ヘルツォークでもあるアルプレヒト・フォン・ブランデンブルグは、まさにこの変りつつある時代を、言わば中世から近世にかけて生きた一人の人間であった。と同時に彼は広大なラントの支配者として、農民や市民とは比較出来ない程の可能性を与えられていた。中世末期プロイセンを分析しつつ追体験するためには、アルプレヒトのような人物の意欲と結果を考量することから始めるのも一つの方法であろう。

私がフバツチの長年の研究成果である本書をとりあげたのは大凡以上の関心からなのだが、もとよりそれはフバツチ自身の関心と必ずしもびったり重なり合うわけではない。そこで、本稿ではそこに盛られた基本的事実を基にして、私達が本書をどの程度利用出来るかを考えてみることにしたい。

マルクグラーフシャフト・アンズバッハは砂地に銀松の散在する、どちらかと言えばブランデンブルグやプロイセンと似た単調な風光の地である。十二世紀以来この地方にヘルシャフトを確立したツォレルン家は、帝国諸侯となり、十五世紀にはブランデンブルグも含む大ハウスマハトを形成していた、アルブレヒトは一四九〇年にツォレルン家の十八人の子供の九番目として生れ、母はポーランド王カシミール四世の娘であった。当時のフュルストの御多分にもれず、この家も経済的に苦しく、後継ぎとならない息子達の将来の基礎を作る為に父親は苦勞していた。アルブレヒトがケルンやヴュルツブルグで聖堂参事会員を経験したのも、当時の通例に従って貴族教会でフリユンデを得させようという父親の配慮からであった。宗教改革前夜のドイツ諸侯の生活は無節度で氣狂いじみていたと言う。しかしアルブレヒトは参事会員としての生活を通してこの風にはあまり染まず、すでにこの頃から倫理や文化に関心を向けていたらしい。一五一一年にドイツ騎士修道会に入ったが、それも本来はフリユンデを得ると言う目的からであった。いずれは総長になるとして身分相応な職として総長を考えていただけで、プロイセンの伝統や状況は全く知っていなかったのである。

若冠廿一歳の青年を総長として迎えるということは騎士修道

会としても例のないことである。アルブレヒトが周囲の状況から他意なくこの職についたとしても、プロイセン側にはそれだけの理由があった。かつてドイツ騎士修道会の存在はそれだけである時点における中世的世界の統一を具現化したものであった。何故なら、地中海からバルト海迄それぞれ歴史的背景を異にした地域に数多くの寄進所領を持ち、それらが総合的に《ドイツ騎士修道会》として総長のもとに把握され得たということは一、一つの統一的世界、乃至は統一的心情を背景にしなければ考えられないからである。しかし十字軍という心情の嵐が過ぎ、十四・五世紀に入ると、生み残された各所領は折からのラント形成の氣運に乗ってゆかねばならず、それぞれ独自の道を歩みはじめた。特にプロイセンでは二度の戦でライヒとの直接の連絡を失ない、南にはポーランド、北にはリタウエンがバルト海への進出を窺っていたので、ライヒとの何等かの絆が切望されていた。かつては無名の団員から選挙された総長に代って、アルブレヒトが選ばれたのは、もっぱらブランデンブルグ家との絆を作りあげようとし、又彼の母方の系列を考慮した修道会側の苦肉の策だったのである。

総長としてアルブレヒトが当面した問題は一四六六年の対ポーランド誓約を改定し、旧所領を回復することであった。その為に彼は同盟政策をとったが、そこに私達は伝統的政策とは違った新しい要素をみることが出来る。教皇はもはや頼りにならず、マクシミリアンはブルグント問題に没頭し、カール五世となつては問題外でプロイセンを犠牲にしてポーランドと条約を

結んだ。アルブレヒトに残されていたのはドイツの他の諸侯特にアンスバッハ、ザクセン、ブランデンブルグ等や場合によってはトルコやロシアと結ぶことだけであった。事実一五一七年には彼はポーランドへの同時攻撃をモスクワで約している。騎士修道会成立の理念から考えれば説明のつかないこの事態も、一つのラントとしてのプロイセンを考えれば当然のことであろう。その他ライヒ内の騎士修道会所領(バライ)にも援助を求めた。この頃の騎士修道会は旧来の姿は残していても実質的には変っていた。彼の政策はまだ漂っている古い理念や習慣を利用しつつ新しいラントを形成することに向けられたのである。

一五二〇年に始まったポーランドとの戦は一四一〇年から続いているあらゆる対立に最終的結末をつけた。プロイセンはかつてない程疲弊し、修道会の統治は弛み、土着貴族層は着々と地歩を拡大していた。一時的な休戦が結ばれると彼は直ちにドイツへ帰り、東奔西走して援助を求めた。ブランデンブルグやアンスバッハでは温い同情を得ることは出来たが、皇帝も他の諸侯も対ポーランド戦に援助出来る程の余裕はなく、又それだけの視野もなかった。統一ドイツが存在していない以上、ドイツ東部の脅威にも関心がなかったのである。その間にもプロイセンの不隠な状態はルター派の浸透と共に高まっていた。皇帝と教皇から見捨てられ、同盟政策にも失敗したアルブレヒトにとって、心の支えとなり、世俗化してゆく修道会国家への対策を考える為の星となったのは他ならぬルターであった。ウィッテンベルクに再度ルターを訪ねたアルブレヒトは、世俗

化を促進し、プロイセンを世襲公国にする案について話し合った。丁度その頃カール五世がフランスに大勝し、ハプスブルグの勢力が強まったのを契機に一五二五年ポーランドとクラカウ条約を結び、アルブレヒトはジキスムントの封としてプロイセンを受け、彼自身はルター派ヘルツォークとしてプロイセンを治め、長い兩國の対立に終止符を打った。プロイセンに関する限り、これをもってドイツ騎士修道会は解体し、《中世》は終わったのである。

しかし、人々の意識のうえではとうの昔に《中世》は去っていた。修道会への反感が強く、団員は白いマントで外を歩くのが危険なこともかなりあったし、一五二五年の解会式でマントから十字架がもぎとられるのを見て、出席していた者は皆ゲラゲラ笑ったと言う。過去三百年の重い伝統を背負い、このような精神的雰囲気のもとでアルブレヒトは新教ヘルツォークとして国造りを始めた。かつては厳格な規律の下で地方行政を司っていた *Konheit* は大部分地方貴族化し、農民の賦役が増大するとケーニヒスベルクのツンフトと呼応して農民一揆が各地に起った。これはプロイセン農民にとっては最後の機会であったと同時にその帰すうが以後の体制を決定的に固めることになった。一揆の対象は中間勢力としての貴族であり、農民はヘルツォークには深い信頼を寄せていたのである。しかし、アルブレヒトはプロイセンをホーヘンツォレルン家のハウスマハトの一環として世襲化する計画に熱中していたし、そのうえザクセン、フランケンでの兄達の経験を知って来いた。更にルターの

影響が強かったので、貴族の口車にのって一揆を鎮圧した。このことは形の上では彼の勝利であったが、長い目でみればランデスヘルルの地位が弱まってゆく決定的な原因ともなったのである。ルターの指示に基いて出された Landesordnung によって世俗・聖界両秩序を併せ持つ新しい国制が規定されたが、すでに均衡の破れた国家は急速度で Adelsrepublik に傾いていた。ドイツ本国のテリトリアルシュタートを手本として国家を再建しようとするアルブレヒトと等族との対決はルターの死後神学論争の形で表面化することになった。これはオシアングター派とメランヒトン派との衝突であり、罪の意識と救済に関するものだったが、等族とヘルツォーク、ケーニヒスベルクの二都市間の争いとして政治勢力を背後に持っていたので、神学論争での敗北はランデスヘルルの敗北でもあったのである。

七十八歳でその生涯を終えたアルブレヒトの晩年は淋しいものだった。二度の結婚にも拘らず子供に恵まれず、等族の圧力とポーランドの干渉のもとに孤立していた。彼は大きく転換しつつある歴史の中に生み落され、そのなかで自分の位置を見出すに至らないうちに総長の職についた。ドイツ騎士修道会自体、言わばドイツのアナクロニズムを体現した存在であったが、それだけに十五・六世紀の転機に将来どのような道へ進むかは未知数であった。アルブレヒトが職についた時にはすでに大勢は決したかにみえていたが、彼はその決定的な瞬間に立つことになったのである。ルター派新教をプロイセンに導入したこと、プロイセンとポーランドの絆を身をもって作

り上げたこと、ポーランド王の受封者となったこと、……これらのことを後代の者がアルブレヒトの功罪として数えあげている。彼はフランケンと常に連絡があり、ドイツ諸侯としての自覚をもっていた。ライヒの東端にあり、ポーランド、リタウエーンその他の国々に囲まれ、早くからドイツ東部の問題を意識していたにも拘らずラントの一体性と Nationalität を守る為にポーランド王に臣従し、ライヒスアハトを受け、その為にプロイセンでの彼の地位も揺ぐことになった。ここにアルブレヒトの悲劇がある。彼はルターの教義を忠実にラントの経営に向けた最初のランデスヘルルであった。神学については必らずしもルターと説を同じくしていたわけではないが、ルターの息子や娘を引取り、ケーニヒスベルク大学で学生と並んで講義を聞く姿が見られた位謙虚でもあった。この大学自体彼の創立になるものである。フランケンから伴ったフマニスト達やコペルニクスも含むケーニヒスベルクのホーフはプロイセンの文化の中心であったし、彼が当時ヨーロッパ諸国の君主と交換したぼう大な手紙はその視野の広さを物語っている。高い教育は受けなかったが関心は広く、手づから手紙、論文、祈禱文（今日でも使われている）更に詩迄書いた。しかし、これらすべての点を考慮しても、彼の一生を単色で塗りつぶすことは出来ない。ナシヨナルなものへの自覚と中世的普遍的世界への憧憬とが同居していたし、激しい宗教感情とフマニスティシユな感覚、*Sacrasai-*の混在していたのである。

三

アルブレヒトの生涯を、状況の変化に対する決断の連鎖として見ると、以上のように展望することも出来よう。ところで、一個の人間の生涯を叙述するには、研究者がその人物の行為のある結果に対して、肯定的にせよ否定的にせよ何等かの価値を認めていることが前提となる。フバッチュがこの書物の中で描いているアルブレヒト像は一体どのような《価値》を前提としているのだろうか。

ケーニヒスベルクで生れ、その大学で学んだフバッチュにとってアルブレヒトは幼少の頃から身近な存在であったから、その叙述は生き生きとしており、秀れたものと言える。フバッチュはアルブレヒトの作者としては適任者であろう。しかし、それ故に又問題が生じてくる。と言うのは、一五二五年という転機を把える観点について、フバッチュがそれを《連続》としている点である。即ち、ドイツ騎士修道会国家からプロイセン公国へ、更にプロイセン王国への連続が根本的テーゼとされている。この連続性への関心は古くて新しいものであって、すでに一九二〇年に E. Marck はヴェルサイユ体制の為にドイツ東部を追われて来た難民を前にしてこの問題を論じ、立場はそれぞれ異なるにしても、E. Caspar, Maschke, H. Rothfels 等も論じている。フバッチュは前二者の連続を行政とジードルングにおいて把えようとした。まず総長がそのままヘルツォークになり、四人の Großgeheißiger が Oberrat の制度へ、Komtur

は Arthausmann へ移行した点、又それぞれのトレーガーが少くとも初期には変らなかつた点を挙げている。更に経済の形態、即ちブルグを中心とした農村の在り方、農民法も旧来のものが使われた点と並んでヘルツォーク時代にもかつたと同様ジードルングが行なわれ、農民の習慣も変らなかつた点を根拠としている。精神的な面では、同時代の歴史叙述にも連続の意識がみられると言う。《外面的な歴史においては一五二五年は一見終末ではあるが、詳細に調べてみると政治的存在の現実の持続には突然の没落がなかつたことが解る。外的な所与を越えて、時にはほとんど断絶しているように見え、細い線で見えないように思えるが、理念の橋がかかっている。》そして、その連続の政治上のトレーガーがアルブレヒトなのである。

注意しなければならないのは、彼の場合《国家》に対する関心が Leithaden となっており、その中に住む農民や市民層に送降りて来ていない点である。確かに制度に関する限り連続は疑えない事実である。けれども、形の上で制度が維持されたとしても（この点も短期間の事実でしかないが）実質的にその制度が前と同様の機能を果たしたとは言えない。重要なのは、十五・六世紀に農民層の地位が極めて悪化したという事実である。これは価値意識の相違なのだろうが、農民の地位、又は社会のダイナミックな構造という観点からみる場合、両者に連続がないことは明らかであろう。クルム法が維持されたとしても、それはケルマーに関してだけであつたと説いている者もある。連続を主張することによって農民層の没落という事実が見

逃されてしまう。アルブレヒトがプロイセンを *Deutschum* の為維持したこと、即ち後のホーヘンツォレルン家の統合の為の基礎を作ったことは確かに彼の歴史的業績ではある。しかし、プロイセンというラントの内部においてアルブレヒトはどのように見られていたか、転換期の農民層や市民層にとって彼は一体どのような存在であったか、言い換えれば社会構造の転機としての一五二五年におけるアルブレヒトの役割は何であったか、を知ることがフバッチェの本来の意図と矛盾するものではない筈である。もとよりその点において本書で言及されていないわけではない。グーツヘルシャフト成立期における為政者個人の研究は今迄ほとんど皆無と言ってもよい状態であったから、本書はその意味で貴重なのだが、後代への政治的業績にアクセントが置かれると、現代につながる歴史の時間的展開の結果の方に關心が向けられ、東ドイツの歴史的発展をネガティブにしか把握しない論者と同じ陥穽に落ちる危険がある。豊富な史料を駆使した労作として私達は全くこの書物に依存しなければ

ならないにも拘らず、違った観点からするとまた研究の余地が大きく残されていることが解る。

- (1) Hübatsch, W.: Europäische Briefe in Reformationszeitalter Würzburg 1948.
 - (2) ders.: Kreuzritterstaat und Hohenzollernmonarchie. Zur Frage der Fortdauer des Deutschen Ordens in Preußen. (Deutschland und Europa. hrsg. v. W. Conze 1951.
 - (3) ders.: Deutscher Orden und Preudentum (Eckpfeiler Europas, Heidelberg 1954)
 - (4) ders.: Zur altpreussischen Chronistik des 16. Jahrhunderts (Archivaltische Zeitschrift 50/51, 1955)
- Forstreuter, Kurt.: Vom Ordensstaat zum Fürstentum, Würzburg 1951.

(一九六一年五月二日)
(一橋大学大学院学生)